



新しい年を迎えて この30年を振り返る



2019年最初のえん通信です。皆さんはどんな新年を迎えられたでしょうか。私はお正月に、映画『こんな夜更けにバナナかよ』を観ました。映画は筋ジストロフィー患者鹿野靖明さんと介助ボランティアの物語で、1990年前後に同じく二人の全身性障がい者の介助ボランティアグループから始まった暮らしネット・えんの前身と重なり、懐かしい気持になりました。

今から30年前、新座市のホームヘルパー（公務員）は5名だったと記憶しています。そんな時代に重度の障がいがある人が在宅で暮らすには、家族が献身的に介助するか（映画の主人公は、母に自分の人生を生きてほしいと家を出ます）、たくさんのボランティアの手を借りるか、二つの選択肢しかありませんでした。そんな時代に、ちょっとずつ手伝うことでこの家で暮らしていけるならと、6年間総勢20名を超えるメンバーが、夜間、深夜、日曜祝日、年末年始もせっせと通いました。けれどもボランティアでは限界があります。そこで新座市の委託を受け『ケアサポートステーション・MOMO』になり堀ノ内病院在宅福祉部門として再出発することにしました。1996年のことでした。スタート直後から、往診の医師と訪問看護の看護師に教わりながら遷延性意識障害や寝たきりの高齢利用者のケアに出向き、高齢者介護のいろはを学びました。貴重な財産です。その後2003年にNPO暮らしネット・えんを設立、現在にいたります。

全身性障がい者の介助にもこの間に公的な費用が出るようになっていきます。同時多発的に全国で起きた活動が支援制度の拡充を促がしたのです。彼らが掲げた『自己決定の尊重、生活の継続』は介護保険の理念にも反映されています。

活動を始めた1989年は、昭和が平成に変わり、消費税導入があり、天安門事件がおき、ベルリンの壁が落ち、激動の年でした。日本の高齢化への備え「高齢者保健福祉推進10ヵ年戦略（ゴールドプラン）」もこの年に策定されました。それから30年、暮らしネット・えんは超高齢化する地域に背中を押されて、今は職員109名、利用者総数約650名の団体に成長しました。しかし当時の経済大国日本は、人口減少の上に格差が広がり巨額の財政赤字を抱え先行きが見えません。そんな中で超高齢社会は続きます。掲げてきた『高齢になっても、障がいがあっても、地域で共に』の達成は、これからが本番です。前を向いてできることを見つけながら歩いていきましょう。あれから30年の早春です。

代表理事 小島美里